

渡りきらぬ橋

長谷川時雨

青空文庫

お星さまの出ていた晩か、それとも雨のふる夜だったか、あとで聞いても誰も覚えていないというから、まあ、あたりまえの、暗い晩だったのであろう。とにかく、あたしというものが生まれた。

戸籍は十月の一日になっているが、九月廿八日だとか廿九日だとか、それとはつきりしない。次々と妹^{きょうだい}弟^いが生まれたので、忘れられてしまったのか、とにかく、露の夜ごろ、虫の音のよいころではあるが、あいにく、武蔵野生まれでも、草の中でも、木の下でも生まれず、いたって平凡に、市中の、ある家の蔵座敷で生をうけた。明治十二年、日本橋区通油町壺番地。ちっぽけな、いやな赤ん坊だったので、何処からか帰って来て見た父は、片っぱの手にとって見てすぐ突きかえしたと、よく母が言っていた。

父には三人目の子、母には初児^{ういし}だが、あたしが生まれたときには、姉も兄も、みな幼死していなかった。清潔^{きれい}ずきで、身綺麗だった祖母に愛されたとはいえ、祖母はもう七十三歳にもなっていたので、抱きかかえての愛ではなく、そしてまた、祖母の昔気質から、も

ろもろのことをはば咄まれもしたり、そのかわりに輕薄に育たなかつたという賜ものをも得た。

次へ、次へ、次へと、妹が三人、その次へ弟が二人、また妹が一人と、妹弟が増えて、七人となつたが、丁度、二人ばかり妹が出来た時分のこと、コンデンスミルクを次の妹に解いてやつたり、その次の子が、母親の膝の上で、大きな乳房を独りで占領して、あいている方の乳房まで、小さな掌てで押えているのを見ると、あたしは涎を流して羨ましそうに眺めていたという。

二歳ぐらいの時だつたのであろう、釣つり洋燈ランプがどうしたことか蚊帳の上に落ちて、燃えあがつたなかに、あたしは眠つていたので、てつきり焼け死んだか、でなければ大おお火やけ傷どをしたであらうと、誰も咄嗟に思つたそうだが、氣転きのきいたものが、燃えている蚊帳の裾から、ふとんと引出すと、そんな騒ぎはすこしも知らずに、そのまま眠りつづけていたので、運の好い子だといわれたときいた。

あたしの眼に、居廻りの家並などが、はつきり印象されるようになった時分の、小伝馬町、大伝馬町、人形町通り、大おお門もん通りといった町は、黒い蔵ばかり、田舎とちがつて白壁の土蔵は、荷蔵くらいなもので、それも腰の方は黒くぬつてあつて、店蔵も住居の蔵も、黒くびかびか光つた壁であつた。それに、暖簾も紺、長暖簾もおなじく、屋号と、印を白

く染めぬいた紺のれんで、鉄や厚い木の天水桶が店のはずれに備えつけてあって、中にはなかなか立派な、金魚や緋鯉が住んでいた。ちらちらと町に青いものが見えれば、それは大概大きな柳の木だ。奥庭には、松や榎かやや木樨もっこくや、柏も柚ゆずの木も、梅も山吹も海棠もあって、風に桜の花片は飛んで来ることはあっても、外通りは堅気一色な、花の木などない大問屋町であつた。

問屋が多いので、積問屋——運送店——の大きいのも、すぐ近くに二軒もあつたし、荷馬車がどこかしらに繋いであるので、泣けば、お馬さんを見ましようというか、夕方ならば、お月さんが出たと門かどにつれだされる位、蟬の声もあんまりきかない四辺あたりで、そのくせ、大問屋町というのは妙に奥や裏の方は森閑としていたもので、真夏でも、妙に冷たい風のくる路のあるような、家居であつた。

あたしの家も、祖父のころは呉服を大名の奥に納める家業、近所にあつた祖母の兄の店が大きかったというが、その兄が死んでから、後妻が、御殿女中あがりだったので、子供に甘くて、店をつぶしてしまつたし、時も丁度御維新ごいっしんの、得意筋の幕府大奥や、諸大名の奥向きというところがなくなつたので、祖父も店をやめてしまつて、あたしが生まれたころには、もはや祖父卯兵衛は物故し、父は代言人を職としていた。

しかし、どうも、祖父の家業は、呉服御用という特種なので、もとより、問屋でもなし、店売りでもなく、注文品を、念入りにしつらえて納めるものであったようだ。反物を畳む、がつしりした小机とか、定木じようぎとか、模様ものの下絵を描いた、西の内紙で張って、絹さなだ紐をつけた、お召物たとう紙などが残っていたり、將軍さま御用の残り裂れで、人形の帯や巾着きんちやくが出来ていたが——もつとも、明治十二年の大火に蔵だけ残して丸焼けになって、本所の回向院えこういん境内まで、両国橋を渡って逃げたということであるから、住居の具合は変りもしたであろうが、とにかく、五軒間口の塀は、杉の洗い出しであつたし、門は檜の節無しを拭き込んで、くぐり戸になっていたし、玄関前までは御影石みかげいしが敷きつめてあつて、いつも水あとの青々して、庭は茶庭風で、石の井筒も古びていた。奥蔵の三階の棟木には、安政三年癸戌建之、長谷川卯兵衛安備やすとむと墨色鮮やかに大書してあつた。

祖父は能書であつて、神社の祭礼や、稲荷の登旗のぼりに、大書を頼まれることが度々あつて、父は幼年から亀田鵬斎や、その他の書家たちから可愛がられ、六、七歳の時分から、絵のたちがよいというので師匠の国年や芳幾よしいくに、養子にくれと懇望されたということであつた。そんな風なので、父は書や画などを好み、剣術は北辰一刀流の、お玉が池千葉の弟子になって、かなりな使い手になっていたので、彼は江戸ッ児でも、江戸城本丸明け渡し

あとを、守護する役などに用いられたりして、刑部省へ出頭するようになった。

そんなことから法律を学び、増島博士をはじめ十二人の代言人が——後弁護士と改称——出来た最初の、その一人になった。彼は早くから自由党に属していた。

あたしが生まれた年の元旦試筆には、忘れてしまったが大物を書き、お酒が好き、撃剣が好き、磊落であつたが、やや、痩せがまんの江戸ッ児肌で、豪傑でもなければ、学者でもなく、正直な、どつちかといえは法律などは柄にもなく、芸術家タイプの、時によると心にもない毒舌を弄してよろこぶ性質^{たち}だつた。母は、父の浅黒く長身なのとちがつて、真っ白な、健康そのものののように艶々した、毛の黒い、そのかわりあまり美人ではなく、学問はないが働くことでは、徳川家の瓦解の時、お供をして静岡へ行つた一家で育ち、無禄の士族たちが、遠州御前崎^{おまえさき}の浜で、塩田をつくつた折りに、十四歳の少女で抜群の働きをして、親孝行の褒状をもらったという女^{しと}で、父とは十六ばかり年がちがつている。あたしはこの母が、人出入りの多い家で、厳しい祖母によくつかえ、よく教えられて、子供^{こども}がふえても女中の数をまさずに、終日クリクリと、実によく忠実に尽して、しかも祖母の論^いしめによつて、いかなる折りも髪かたちをくずさず、しじゅう身ぎれいに、家の内外も磨きあげたようにして、終日、ザブザブと、水を豊かに汲みあげているような日常を見て、

人は働くものだ、働くことは美しいとの觀念をたいそう植えつけられている。そして、また、その当時の、知的階級に属した家に生まれながら、奥さまぶった容体を学ばずに過し得たことは、母を徳としている。それもこれも、祖母の睨みがきいたからだと、後日母は言っていたが――

そこで、あたしは六歳の年に入学した。学齡ではないのだが、私立尋常代用小学校という札の出たのは後のことで、秋山源泉学校という、別室には、習字と裁縫と、素読だけに通ってくる大家おおじこの娘たちもあるので、六歳でも通えるのだった。

引出しを二ツもった、廉品そまつな茶塗りの手習い机と、硯箱が調えられた。白紙を一帳綴じたお草紙、字が一字も書いてない真っ白な折手本、椎の実筆と、水入れと、※の柏墨が用意され、春のある日、祖母に連れられ、女中と書生と俵夫が机をかついで、二丁足らずの、まっすぐな新道を通って、源泉学校へ入学した。児童たちへのおみやげの菓子の大袋は、幾つかさきに届けられているので、白砂糖の腰高折と目録包みあばたが校長の前へ出された。白い四角な顔の、お習字を教える校長のお母さん、黒い細い顔で菊石あばたのある校長、丸い色白の御新造ごしんぞさんたちが、苦いお茶を出し、羊羹を出してもてなした。先生に連れられてお座（席のこと）につくと、幾人かの生徒が、お盆に盛りあげた、瓦せんべだの、巻きせんべ

だの、おこしだの、落雁だのを、全校の生徒にくばるのに、二個三個と加えてゆくのだつた。後に、あたしも貰うようになった折り、一日に、二人も三人も新入生があると、冬は蜜柑などがまぎって、子供たちをよろこばせた。

幼年生のときの思い出は、赤い裏の、海軍士官の着るような黒いマントを着てかよつた。小さい前髪と、両鬢に奴さん^{やつこ}を結んだおかつぱの童女が、しきりに手習い草紙を墨でくろくしていたことだ。それから、机の引出しや硯箱の中へ千代紙を敷いて、白紙^{かみ}を丸めた坊主つくりや、細くたたんで、兎の耳のように、ちよいと結んだ、仮定の人形の首に、色紙の着ものを着せて飾り、おばさんごっこをすることを覚えた。二年すると妹があがつて来た。利口ものの妹は、両親の寵児だったが、強情なので学校ではよくお残りをさせられて、あたしの方がかなしくなって日暮れまで、ガラソとした教場でオロオロしていたが、祖母は一層きびしく仕付けてくれるようにと、そんな時は礼を述べさせに人をよこしたりした。勿論、先生に御母堂や御新造がとりなして帰してくれようとしても、家の者は、お連れ申しますと叱られますと、あたしたちを残して行つた。

教場の——それは、先生の住居を廻つた、かぎの手なりの平屋建ての、だだっ広い一棟で一室だけだったが、畳があげられて板を張りわたし、各^{めいめい}自の机や、五、六人並べる、

学校で備えつけの板だけの長い机が何処にか取りかたづけられて、二人ずつ並ぶ、腰かけつきの、高脚の机になった時、代用小学校という木札にかわって、高等科はないが温習科というのが二年出来た。唱歌の教師が通つて来て、英語もその教師が望むものだけへ教えることになった。すべて、六歳が、ものの手ほどきによい年齢ということで、長唄なども習わせかたはきびしい方だった。踊りは、すぐ近くの師匠が、ちいさい時分から眼をつけて、連れに来ては舞台へあげて遊ばせていたが、踊りの師匠の母親が、あまりツベコベ追従するので、祖母がいやがって行かせないようにしてしまった。どうも、このことは、何か家庭に關係することがあつて、あたしに芸を一ツ覚えさせなかったことになったようだ。

堅田というしたかた囃子方の師匠の妹が父の世話になつていて、あたしを可愛がるのが、母にもしろくないのが原因だったようだが、それよりも、あたしにとって、大変な不運だったのは、母方の祖母が何かの便つて次があつて、あたしを下田歌子女史の關係する塾とかに――それが、何処であつたのか知らないが、入れたらと言つて来たときには、こんどはどういう意味で祖母が反対したのか、小軋轢があつたふうで、沙汰止みになつてしまった。「小學生徒心得」という読本が、楷書入りの本を読み習つた最初なので、下田歌子の名は幼少な耳にも止めていた名だった。そんなことで、あたしに対する家庭教育は、世の中や、家

の業とは大層異った、後^{あと}びつしやりなものであった。

ともかく泣いて願って、英語は習うことになったが、あいにく、ぶるさげていった赤インクの大きな壘を、白地のゆかたの出来たての膝へ、前の席のものが立ったはずみにひっくりかえされて、血をあびたようにこぼしてしまってから、それが長唄杵屋のお揃いで、学校の帰途^{かえり}に行く月浚いに、間にあうように新しく縫われた浴衣であるにしろ、それだけの過失で、英語は下げられてしまった。

しかし、子供というものは、不思議なところで自分を生かすものである。読みと、算術——珠算^{たまざん}を主にして、手習いと、作文だけの学校でも楽しかった。遊び時間はかなりあるから、あたしはみんなの石版をならべて、即興のでたためのお話——児童作品長編小説を、算用数字の2の字へ二本足をつけて、毎日つづけて話すのだった。これはたいした人気で、あたしのお座は、十重^{とえ}にも取りまかれ、頭の上からも押つかぶさるほどに愛された。このことを、ある時、校長秋山先生が自慢で、家へ来て話されると、どうも、いけない結果があらわれて来た。

折りもあり、幼少から可愛がつて、自慢の弟子にしてくれていた長唄六三郎派の老女^{としより}師匠から、義理で盲目^{めくら}の女師匠に替えられたりして、面白味をなくしていたせい^{ここ}か、九

歳の時から始めていた、二絃琴の師匠の方へばかりゆくのが、とかく小言をいわれるたねになつていたところ、この二絃琴のお師匠さんがまた、褒めるつもりで、宅へお出でなすつていても、いつも本箱の虫のように、草双紙ばかり見てお出でなのに、いつ耳に入れているか、他人のお稽古で覚えてしまつて、世話のないお子ですと、お世辞を言つたのだつた。

あたしは、草双紙に実が入つて、日が暮れてから、迎えをよこされて帰つて来て叱られると、大勢のお稽古を待つていたというのが逃げ口上だつたのが、すっかり分かつてしまつた具合のわるい時だつたので、俄然取りしまりが厳しくなつて、よからぬ習慣は、寸にして摘まずばといったふうに、ともするとあたしは、奥蔵の縁の下に押込まれたり、蔵の三階に縛りつけられたりして、本を——文字のあるものを見ることを厳禁されてしまつた。それもまた、親の情であつたかもしれない。あたしは、アンポンタンと呼ばれ、総領の甚六とよばれ、妹の色の白さに対して鳥とよばれ、腺病質でもあつたのか、左の胸がシクシクして何時もそつと揉んでいたが、十二三には、祖母を揉みに毎日くる小あんまに、叩いてもらうほど苦しかったので、母は、机にギツシリと胸を押しつけてばかりいるからだと怒つてもいた。だが、おそろしく幼時は臆病だつたので、蔵へは独りでもものも取りに

ゆけないし、我が家でありながら、ぼんぼりをつけなければ、廁へもゆかないというふうであつたから、十一やそこらで、床の高い、石でかこつた、土蔵の縁の下に、梯子をとりあげられ、薦むしろ一枚の上におかれることは、上の格子から光のくるのを遮ぎられてしまうと、冷汗を流して、こおろぎに脅えたり、夏であると風窓が明いていると、そこへ顔を押しつけていたものだった。そんな時、まだちいさかつた三人目の妹や四人目の妹が、外から覗きに來て、そのまま土に坐り込んで、黙つていつまでも風窓の内外から顔をおしつけくらしているのだった。はしごをはずされて三階に縛いましめられていても、彼女たちは、いろいろな知恵をふるつて鼠のように登つて來て、縛めを解いてくれて、そこでお話をせびつたり、石版をもつて來て絵を描かせたりするのだった。

十三歳になると学校をさげられて、あらたに生花と、茶の湯とに入門させたが、午前九時から午後五時までは裁縫をしこまれた。

我が家の家憲としては、十一二歳を越すと、朝の清掃を大人同様、女中も書生もわちなく一様にさせることで、妹きょうだい弟の世話、床のあげさげが、次の妹へと順送りになると、煙草盆掃除から、客座敷の道具類の清ぶきになる間までに、庭掃除から、玄關掃除、門口に箒目を立てて往來の道路まで掃くこと、打ち水をする事、塀や門をあらつたり拭いた

りすること、敷石を水で洗いあげのことを、手早く丁寧^{ていねい}に助けあつて励んでやらなければならぬ。それは夏冬をきらわず、足袋などはいていてするような、なまやさしいやりかたではゆるされなかつた。働かないのは、一番目上で老齡である祖母と、幼いものたちだけだつた。父も自分の床をあげてキッチンとしまい、書齋の掃除まですることもあつた。裁判所へ行く前に、多くの客が、二階へも階下^{した}へも、離れへも、それぞれ他人に聴かせたくない用をもつて来るので、母は一時二時に寝ても、朝は五時かおそくも六時前には起きていた。

夏など、みんなが目ざめる前に、三味線の朝稽古をすまして来ようと、夜の白々^{しらしら}あけに、縁の戸を一枚はずして庭へ出ると、青蚊帳のなかに、読みかけた本を、顔の上に半分伏せたまま眠っている母を見ると、母も本は読みたいのだなあと、たいへん気の毒な氣がして、早く行つて歸つて来て、掃除やなにか手つたおうと思つた。

二

朝夕に、腰を撫で、肩をもんであげた祖母は、八十八歳であたしの十五の春に死んだ。

あたしを一番愛していたが、厳しいしつけでもあった。一ツ身を縫うにも、二度三度とい
て、縫い直しをさせるのだった。そういうことを恥かしがらないアンパンタンでも少々気
まりの悪いこともあるし、教える人の方が、まだ小娘さんなのに、あんまりひどいと怒る
こともあった。

ともかく、あたしの教育は、本を読ませないことというに、何時かきまってしまうてい
たが、まだしも祖母のいるうちは、あたしも小さくなっていたし、母たちも幾分祖母へ遠
慮をしていたが、段々とあたしは知恵を出して来た。読み書きをするのに、母が労れて眠
る時分をはかり、妹と二人寝る部屋の障子の方へは、屏風やら何やらで灯影をさえぎり、
これでよしと夜中の時間を我がものがおに占領しだした。

ところが、^{ランブ}洋燈の石油はへって、ホヤは油煙で真っ黒くなる上に、朝寝坊になって、父
が怒って、冷水を^{みず}あいていいる口へつぎ込むことなど、仕置きされることが重なってしまっ
た。ある夜中には、寝たと思つた母が部屋へはいつて来て、大いに怒って父を呼び、父が
優しくて見逃しているのだというので、父から楊弓をもって激しく折檻された。祖母のい
るころでも、母が強く怒ると、^{あね}姐さまのはいつていいる手箱も、書きものの手箱も、折角、
かくして、ぼつぼつと溜めた本類も、みんな焚^もしてしまわれたりしたが、そんなにしても、

妹たちも好きだったので、いろいろな工夫をしてくれた。家にも何かしら読みものは多くあった。母が、浴衣ならば、家内が多いので、一度に十反くらいを積んで、縫えと出すと、もう家において縫うようになっていたので、静かな、なるべく母の目から遠い二階の部屋にあがって、それこそ朝の仕事も早くすませ、身じんまくも早くしてしまつて坐る。そうすると、頭をよく働かして、たいへん手早く巧者に裁断^{たつ}てしまつて、早縫いの競争なのだが、母が見廻りになると、実に丁寧な縫いかたをしている。で、一日に一枚はこの分ではどうかと思つてもらつておいて、次の妹と二人がかりで、二枚も三枚も拵らえあげてしまつて、それからの残りの時間を、雑読、乱読、熟読の幾日かをものにしていた。

そこで、おかしいのは、母は、なんでそんなに厳しくしたかといえ、出来もしないことにふけて、なま半可な女^{もの}になるのを、ばかに怖れたのではないかと思う。だから、あたしが、書いたり、読んだりするのは氣に入らないが、ほかのことで、皆とひとしなみに、楽しみとして見聞きすることは許さないではないから、あたしがずっと小さいころ、書生が幻燈会をして近所のものに見せたりするのを、共に楽しんで見ていたように、友達たちで、三味線などひいて芝居ごっこなどしても、それは遊びとして大目に見ていた。そして、あたしどもが、幾分、新知識を得ようとするとき、玄関の大火鉢の廻りや、紫檀の大机の

もとに集まって、高等学校から来る大先生に、西洋ものの小説や劇の話をきくのも、それも許した。

大先生といつても、一高の生徒だった鶉沢総明氏が、まだ惣一といった昔のことで、はじめあたしたちは、千葉の田舎から来たはやや中学生の書生さんの頭に、白髪しらがが多くあるので、黒い毛の方を抜いてしまう方が汚くないなんぞと、頭の毛を引っつかんだりした、いけない幼女だったが、独逸人の教師の家へ寄宿して、やがて一高の生徒になると、忽ちあたしたちの大先生にあがめ、新しい話——つまり文学を聴くのに貪慾になって、それからそれからとせがんだものだつた。次の妹は、趣味の共通から、共同の陣を張りはするが、もともと母の秘蔵娘であるところから、ちよろりと裁縫の時間の内幕を洩らしてしまつたりする。そこで、いよいよ懲らしめのため、も一つには行儀見習い、他人の御飯を頂かないものは我儘で、将来人が使えないという、立派な条件を言いたてに、母が大好きで、自分が、旧幕時代の大名奉公というもの、御殿女中というものにあこがれていた夢を、時代の違つた時になって、娘によつて実現して見ることにきめてしまった。父が、旧岡山の藩主であつた池田侯の相談役であつたのと、そのすこし以前にお家騒動が起りかけたりしたを処理したので、そんな縁故から頼み込んで、旧藩臣の身分のある者の娘でなければ

つかわなかつたという、老侯夫妻のお小姓——平ったくいえば、小間使いみたいな役につけてもらうことになった。十六歳だつた。

若いものなどは皆^{かいもく}目^めい^いない広い邸^{てい}だつた。鼻の頭の赤い老臣が、フーフーと息を吹きながら、袴の裾で長い廊下を拭くように歩いていった。それが有名な国文の学者だといった。表門の坂を俵なり馬車なりが下つてくると、飛び出して、主人の時などは土に手をつく人品の好い門番が、以前は一番上席の家老だつたというふうで、小使いも下の女中もみんなお婆さんかお爺さん。たまたま二、三人、上女中^{かみ}でないものに若い女がいたが、年寄りもおんなしことで、ただ年が若いというだけ、新時代に対してなんにも知らない人たちがばかりだつた。

鍾^{しょうあい}愛^{あい}の、美しい孫姫さんが、御方^{おかた}（姫の住居——離れたお部屋）に乳母たちにかしずかれていた。侯爵夫人になられた細川博子さんがそのお姫^{ひめ}さまであつたが、あたしが奉公してから間もなく、ウエスト夫人という西洋人のところへ、英語を学ばれに通うことになったとき、そのお乳母さんが附いてゆくのが、およそあたしが、生涯に羨ましいと、人のことを羨んだ、たつた一つのこと、お今さん、あなたは傍にいらつしやるのときいたら、はい、すぐお傍にいますが、なんにも覚えてませんと言つた。何とやらん無念のおもいが、

胸にグンと来るのを、どうしようもなかったのは、志望してそのお伴のまたお伴に、ついてゆけることなど、およそ出来るわけのものでもなかったからだ。次の部屋にしようとも、あたしの耳は発音をきくだろう、耳で覚えたものを寝てからブックに照し合わせても解る筈だとは——とは、とは、思いもするが、あたしは読ませないようにという意味が、御奉公の眼目におかれているので、お下がりの新聞さえ読ませられないのだ。御家令というのが、もとの上席家老格で、その人があたしの父の親友、そしてその人が母からよく頼まれて、どうも変な子だということを、年寄りたちに伝えてあるし、母がまた一々、他の人にも、あたしの病いの虫のように話したのであるから、あるいは、老侯爵は面白がつて許してくれるかもしれないが、傍のうるさが思いやられて、お孫姫さま英語御教授をおうけになるお供を、お願いする機会はなかった。

だが、それは、その場合大望すぎたのだ。あたしはこれでなかなか自由の時間を持っていたのだ。家にいる時とちがつて、夜中の時間は絶対に自由にできる。といって、もとより人に知れないようにではあるが、そこにはまた何やらん、やりよさがあつた。お上女中の部屋は二、三人ずつの共同部屋で、八畳、六畳、四畳半、三畳の四室に屋根裏二階が物置きになっていた。あたしが置かれた部屋は格の好い方で、老侯の愛妾の部屋に隣り、殿

様付きの老女格の人と、御前様づきのお側女中との二人が一人の下女中しもを雇っている世帯へ、食事は御番ごばん——主人の食事係が賄うことにして、部屋だけ居候だった。

老女中さんたちは自分賄いの共同台所をもっていたのだから、いきおい物資の消費を節約する。御殿は電燈であつたが、おひけになると御寝所や次の間は燭台になって、西洋蠟燭がともされる。それを朝ごとに掃除するのもあたしの役目の一ツだ。あたしは、涙を垂らしたともしかけの蠟燭を、折角きれいにした燭台へさすのは景氣がよくないので、日ごとに新しくした。夜が長いと、ともしかえるように新しいのを一本添えておくことも忘れなかつた。それで、知らず知らずにともしかけが大きな箱へ溜ってくる。それを一本もつて来て、ごく短いのを机の角に立てて、ふとんの上にニヤニヤしていたものだが、今度は、そのうちの長いのを選つて、部屋用にさせた。ともしかけは、それまでは取り捨ててしまわれたそうなのだが、老女たちは感心だと言ふこんだ。

それによい事は、隣りの部屋ぬしも夜中は不在、わが部屋もお詰め処へ寝る番が二人とも一緒の日が多い。そうなると居候が大威張りで、自室の女中も、となり部屋の女中も、若いものがお引けすぎに寄つて来て、芝居の噂話をよろこんでして、お菓子を食べて帰つてからが我が世なのだった。権威のあつた御愛妾さんも、御酒が飲めるほうで、毎晩部屋

で晩酌のあとは、部屋女中から、あたしからきいた芝居の話をきくのを珍らしがって、夜中の仕事も聞かぬではないが、そんなに好きなら仕方がないと、大目に見てくれたりした。あたしは六円の月給をはじめて得て、三円を食費の足しに差引かれても、残るお金で毎朝小使いさんが下町へ買いものに出るのに頼んで、書籍を購うことが出来た。その時分『女鑑』だとか『大日本女学講義録』などが出て、学びたい餓えを、すこしばかりは満たしてくれた。

しかし、間もなく、あたしの胸は本痛みになり、隠していたが、ある日の正午ごろ、おくれた朝の仕事を終わって、身じまいにかかろうと、倒れそうな身を湯殿へはこび、風呂にはいるとだめになった。ここで倒れては大変と、拭うひまもなく衣服に身をくるんで、部屋までどうして帰ったか、壁ぎわに横になったまま、半ば意識を失って、死生の間を彷徨する日が十日もつづいた。幸いと、赤十字社の難波博士が主侯の診察に来られる定日^{じようび}だったのだ。あたしは肋膜炎の手当がほどこされた。冬のはじめのことだった。

赤十字病院へ入れるにしても、暖かい日の真昼、釣台でといわれたのを、母は家へ連れて帰りたいと願った。彼女も死ぬと思つたのであろう。あたしは夢中で、暫らく帰らない家も見たいとも思っていた。送るものは、早く癒って、また帰って来なさいと、主侯夫妻

まで部屋に来て見送ってくださいだったが、命冥加にもどうやら命はとりとめた。二月の末に、病みあがりの、あと養生もしないで邸へ帰った。その時は息切れが甚しどくらいでわからなかったが、喘息がその次の冬になってあたしを苦しめ、心臓も悪かった。でも、どうにか押し隠して、自分の自由のある夜の世界を楽しんでいたが、息切れと、膝関節炎になって、日本館の長い廊下や、西洋館の階段を終日歩き廻る役は、だんだんつらくなって、人を見たくない時は這ったりしました。

足かけ三年目の初夏、奉公をさげられた。あたしは家にいて、また裁縫や解きものの時間を利用しました。

おかしな事に、肋膜炎で病らったあの大病のあとの、短い日数ひかずのうちに、あたしは竹柏ちくはく園えんへ入門していることだ。ほんとは、もっと早く奉公に出されぬ前、祖母が死ぬと直きに、弟をねんねでおんぶした仲働きが、人形町までといって出た、あたしの買いものの供に付けて出されたが、この女中は二十歳はたちを越していて、何かよくわかったから、却って道案内をしてくれて、神田小川町の竹柏園の門に立ったことがあったのだ。まだお若かった佐佐木信綱先生と、新婚早々の雪子夫人は、その時、花簪を挿した、ちりめんの前かけをしめていた、あたしの姿を今でも時々おっしやる。

さて、入門したといっても、こつちがしたつもりだけで、実のところ、東脩そくしゅうもおさ

めたやら、どうやら、福島の人で、あたしたち姉妹を可愛がってくれた、あまり裕福でない、出入りの夫婦にたのんで、榛原はいばらで買った短冊に、しのぶ摺りを摺ってもらいにやって、それが出来て来たのを、十枚ばかりおみやげに持っていたのが、ありったけの心持ちだったのだ。ずっと帰って来てからは、大胆になって、かまわずに稽古日には朝から出かけた。もとより本はないから、先生のうちの玄関の、欄間までギツシリ積んである本箱の上から出して頂くのだった。夏の朝、早くから行くので、昌綱さん（先生の弟御）が大急ぎで座敷を掃いて、踏みつきをして、上の方の本箱から、納めてある和綴本わとじの大判のを出して貸してくだされた。源氏や万葉のお講義、その他の物語のこともあった。先生の奥様が、母の妹の連合いの上官で、官舎であったのかどうか、おなじ猿樂町の、大きな門のある構内に、お住居があったのと、藤島さんの一粒だねの令嬢をおかたづけになったほどのことから、先生については、よほどの信用があったから、母も、国文学を学びに通うことは見て見ぬふりをしてくれるようになりはしたが、許可されたのではないから、足りとも足りなくってもお小遣いのうちから小額の月謝をもって行ったのだが、気まりわるくも思わなかった。朝の仕事をすまずと御飯を食べている暇がなかった。神田小川町までで

はあるが、歩いて通わなければならない。大雨が降ると、帰りには足駄はだしをぬいで跣足で歩いてくるので、漸く、近所の眼がうるさくなりだした。そんな日には、大問屋の店の者は、欠伸あくびをしているのもあるから、あたしの育ちを、赤ん坊の時から知っている、旦那たちまでが気にしだした。

「先生ンとこのお嬢さん、どちらへおやりになつてゐるのかと、申す者もございません」

と、父に耳打ちをする者もあるので、母が気にしだした。縁談なども、選りにもよつて近所の鉄成金の家で、家じゆうで芸妓遊びをするといった派手な家からの所望を、昔を知つてゐるから大事にするだろうとか——厳しく躰しづけたのは、そんなところへやる為ではなかつたであろうに、若き娘は、暮しむきの賑わしさに眩惑されて、生来の氣質をあらためるかとも思つたあやまりであつたでもあろう、もとから知りあつてゐた両家は頻繁に往来し、道楽で勘当されてゐたという次男に分家支店をもたせ、あたしを貰うことにきめてしまつた。

——いやだ、いやだ、いやだ。

訴えるすべもないので、あたしは枕もとの行燈を、ひと晩中に真つ黒におなじ字で書きつづしてしまつた。父に見られたら、どうにかなるという思いで一ぱいだったが、なんの

こと、翌日は真つ白に張りかえられてある。どうしてよいか分からぬ憂鬱に、病わずらいついた。長く寝てしまったが、漸く床の上に起きあがる日、びつくらしたのは、立派な結納の品々が、運びこまれ、紋付きの人たちが、病氣全快のあいさつと一緒に、祝着申しますとあたしに悦びを述べた。

だが、決心はついた。自由を得る門出に、と、あたしは寒い戦慄のもとに、親のもとを離れる第一歩を覚悟した。昔の人が厄年だという十九歳の十二月の末に、親の家から他家へ嫁入りとなつて家を出た。嫁にやられるには違ひはないが、あたしは円満に親の手を離れる決心であつた。だから、途中からでも逃げたい気持ちだったが、父の恥を思うと躊躇させられた。それにまた、華々しいほどの出入りの者にかこまれて、身動きも出来ない羽目となつていた。母は、さすがに、子の心は察しがつくと見えて、紙入れをもたせなかつた。一銭の小遣いもわたさなかつた。

以上が、明治十二年末から、二十年の末までの、東京下町の、ある家庭の、親に従順な一人の娘の、表面に現われない内面的生活争闘史である。以下は、彼女が、彼女自身で、茨を茹りながら、自分の道へと、どうにかこうにか歩き出して来た道程であるが、はじめから本道を歩きださぬ者には、よけいな道草ばかり食つて、いくらか所念の道は歩いてい

ない。振りかえって見るのも嫌なくらいである。あたしはまっしぐらに、おもてもふらず行こうとすると、きつと障碍が出来てくる宿命に生まれついてでも居るようだが、いつて見れば畢竟は努力が足りないのだ。断わっておきたいのは、日に日に進歩した女子教育とは、およそ反対の歩きかたであつたので、これが明治女学勃興期の少女の道と思つてもらいたくない。きわめて歪んだかたちなのだ。女流小説家として有名な、故一葉女史は、その前年明治廿八年末に物故されている。

三

そこで、生活は一変したが、婚家では困つたお嫁さんをもらつたのだつた。陽気な家のものたちは、あからさまに言つた、水に油が交つたようだ、面白くない、みんながこんなに楽しく団欒して食事をするのに、この娘は先刻こさつきから見ていると、一碗の飯を一粒ずつ口へはこんで、考え込みながら噛んでいる——貧乏公卿の娘でもないに、みそひともじか——お姑さんはあられげもなく、そつと書いたものを見つけると、はばかりへ持つていつて捨ててしまう。

病氣がちなあたしは、芝居のお供、盛り場での宴席、温泉場行きもみんな断わって留守番を望んだ。出入りの貸本屋にお金を出して新本をかわせ、内^{ない}密^{しよ}で読んで、直きにやつてしまうので、彼は注文次第で、どんなむずかしい書籍^{ほん}も買つて来てくれた。あたしはまた、解ろうがわかるまいがむずかしいものに噛りついて、餓えきった渴きを癒した。だが、道楽息子が直きにまた勘当されたとき、この時こそ自分だけで自分を生かす時機^{とき}がきたと離婚のことを言い出すと、先方の親たちは妙なことを言い出した。悴の嫁にもらったのではない、家の娘にもらったのだ。だから、何処へいっても嫁とはいわなかった、娘だといつてきていた、実子の娘だと言つていたではないか、帰さないと。

あたしは世間知らずだった。自己のことにばかり目がくらんでしまつて、明^{はつきり}瞭した眼をもたなかった。真の愛情がないものが、なんでそんなことを言うのか——変だとは思わないで、ただ厭だとはばかり思った。だから、厭さが昂じて死にそんな病氣ばかりした。生まれた土地に名声のある我が家を、古鉄屋から紳商になりかけた家が、利用するのを察知しなかった。父の身邊にすこしの危惧も警戒もしなかった。

父は、前にも言つた通り、自由党の最初に籍をおいたが、脱党して以来口ぐせのように、法律も身にあつた職業ではない、六十になったら円満にこの家業もやめると、子供であつ

たあたしなどにさえ、時折り洩らしていたほどで、あたしを相手に茶をたてたり、剣を磨いたり、下手な俳句をひねったりして、よく母に、あなたが発句ほつくをつくるので考え込むから、おやすが真似をして溜息をつく、間違った抗議をしたものだった。父は幼少のあたしを連れて、撃剣の会へいたり、釣堀にいたり、政談演説会へいたりした。種々な名誉職をもつて来られても、迷惑だと断わるのがつねだった。よんどころなく弁護士会長とか、市の学務委員とか、市参事会員とかにはなっていたが、恬淡な性質で、あばたがあるので菊石きくせきと号したりしたのを、小室信夫しのぶ氏が、あまりおかしいから溪石けいせきにしろと言ったというふうな人柄だった。

しかし、父の酒飲みなのを知って舅たちが毎夜酒宴を張って、料亭に招じるのを、あたしは見まい聞くまいとばかりしていた。いつであつたか、父は米国から帰って来た星亨氏に内見を申し込まれ、星氏が総理大臣になることがあつたら、父に市長になってくれと言われたが、嫌だと言ったということは、あたしに話したが——どうも、あたしの婚家のいやな気風が、生家の、あのものがたい家憲の一角を、ぶちこわしている気がして、不安に思いつながら、あたしは父と母にも遠くなっていた。

父は、不名誉な鉄管事件というものに連座した。父は手紙でもって言つてよこした。

長く考えていた良いことを、ちょっとした短いみじかい分時にぶちこわしてしまった。間違つた思慮は一分時で、悔いは終生だ、子供に済まない――

あたしは、それを読んでやっぱり父だったと嬉しく思った。誰のことも、そのよつてきた道程もいわない、すべてをみんな自分で背負おうとしているのに、あたしは父を見た。よし、あたしは、この後自分のゆるさぬ曲がつたことを一分もすまい、潔癖すぎて困るほど清廉に生きて、父のあやまちは性分ではなく、弱さから負つた過失だ。自己の罪として受けた心根を知るあたしだけが、錢を愛さず、事志とちがつた父の汚名を、心だけで濯^{すす}ぐうと思いをかためた。

で、読み、書くために自立しようとして来たそれまでの志^{こころざし}望を曲げて、まず、人間修業から出直しすることにした。独立するまで、二度は帰るまいと立ち出た実家へ帰つて、病をやしない、すこし快くなると釜石鉾山へ行つた。そこで三年もすごせば勘当息子の帰参が叶うという約束のもとに行つたのだ。そのあとであたしはあたしの道へ出ようと思つた。鉾山所長の横山氏夫妻が、その息子一人では預かれぬと言つたから、行つてもらいたいというのが、先方の両親の願いだった。

事件の最中で、心弱くなつていた父は、病みやつれたあたしを上野駅まで見送つてくれ

て、二度とやりたくないのだがと呟いていた。しかし、この山住みの丸三年は、あたしに眞の青春を教えてくれた。肝心の預けられた息子は居たたまれなくて、何かにつけて東京へ帰つて長くいるので、あたしは独居の勉強が出来た。県道からグツと下におりて、大きな岩石にかこまれた瀬川の岸に、岩を机とし床として朝から夕方まで水を眺めくらして、ぼんやりと思索していた。ある時は、水の流れに、書いても書いても書きつくされないような小説を心で書き流していた。「一元論」を読み、「即興詩人」を読み、馴れない積雪に両眼を病んで、獣医も外科医も、内科も歯科もかねる医者に、眼の手術をしてもらつて、それでも東京へは出ず、頑固に囲爐裏のはたや炬燵のなかで、繃帯をした眼で、大きな字を書いて日を送っていた。

横山所長は、釜石鉋山をものにするまでに、座敷牢へ入れて止められたほどの苦勞をして来て、くされ半纏に縄帯ひとつで、鉋夫と一緒にゐて働いた人であるし、夫人は夫を信頼して、狐狸の住家だった廢鉋の山へ来たという、東京生まれの女性であつただけに、大變あたしを愛^{いと}しんでくれた。

——はじめ聞いていたことと、あんまり違ふので——と夫人は言われた。他の者なら、辛抱なさいと言うのだが、あなたにはそうは言わない。すこしも早く、あなたは自分だけ

になる方が好い。もう山になんぞいないで、十分に自分の道へ出た方が好い。

そう言われて、はじめて道が開けた気がしだした。あたしはこの山住みで、小さな作^{もの}を投書して特賞を得たりしたが、これは実力がどの位な辺かという試しにすることで、これならなぞというたかぶった気持ちではすこしもなかった。

東京へ帰ると、舅が亡くなったりして、離婚のことを言い出せなかった。だが、ぼつぼつと書くものは通るようになって来て、今度は離婚に、婚家の方で意地悪をはじめ、かなり苛酷な目にも逢ったが、その為あたしの健康がおとろえ、もはや生きまいと思われたほどだったので、肺病ではしかたがないと、漸く事がきまった。

その前にあたしは家を出て、実家の世話になっていた。それは一つは、勘当息子にも以前の家をあてがわれ、多少の資本^{もとで}をもわけられるようになったから、あたしの心に定めた通りになったから、やましきところがなかったのと、も一つは、あたしの山に居ることを聞いて、作品から慕ってくれていた少年があつたから、あたしは、心にもなき家に止まって、その少年の愛を告げる心を掴んでいるのは、両方に対して心苦しく感じたからでもある。あった。

あたしは、漸くものを書き出しうるようになっていつつあつた。遅まきながら築地にあつた

女子語学校の初等科に、十二三の少女たちと一緒になつて英語をまなび出した。そのころ父は、一切の公職から隠退して、いくら勧められても出ず、まことに世捨て人のごとく、佃島の閑居に隠遁していたので、あたしは父の傍にいて、父を慰めながら、住吉の渡船^{わたし}をわたつて通い、日本橋植木店^{だな}の藤間の家元に踊りをならいなどして、劇作を心がけ、坪内先生によつて新舞踊劇にこころざしていた。

四

そのころ、母も、まだ巢立たぬ弟妹たちのために、父にかわつて、生活の保障をしようとして彼女の性分にあつた働きをしていた。以前^{もと}すこしばかり、其処を手に入れる時に、お金を用立てた人が死んで、その後家たちは、新橋で旅館をもとからの商^{しょうばい}業にしているので、丁度引受け手を探していた、箱根塔の沢の温泉をゆずつてもらつて、経営しはじめた。

馴れないことではあつたが、母は働きずきであつたし、客あしらいも知っているのに、父のまがつみを同情する知己の鼯^ももあつて、温泉亭家業は思いがけないほど繁昌した。

それだけに、母も漸く、女も何か知らなければ、こんなことしか出来ないと悟った。かような家業でなければ子供を教育しながらでも出来るのにと、それは、ひしひしと彼女に後悔に似たものを思わせて、あたしを、今度は以前とはあべこべに大事にしてくれ、もはや、家を出てくれるなど言い出した。

あたしの自立は、また此処で一頓挫しなければならなかった。しかし、書いたものは、歌舞伎座や新富座などで、一流中の一流俳優によって上演されるのがつづくようになった。女流劇作家も他にいなかったし、女流の作が劇場外からとられるのも最初だったが、どうしたとか、絵ハガキなぞも上方屋かみがたやから売り出されたりしたので、母はいよいよ悦ばされ、袴をはいてくれれば、頸からかける金鎖と時計を買ってあげるなどと、とぼけたことを言ったりするほどであった。そして彼女も、一層活動しようとした。

そのころ、芝公園内の、紅葉館こうようかんという、今でこそ、大がかりな料亭も珍しくないが、明治十四年ごろの創立で、華族や紳商が株主になって、いわゆる鹿鳴館時代の、一方の裏面史を彩る役目をもっていたうちが、創立者の野辺知翁が死んでから萎微していたのを、当時の社長におされた中沢銀行の中沢彦吉氏が、母を見込んで引き受けてくれないかと、再々足を運ばれた。

中沢氏の後妻には遠縁の女もいつているので、母はたいへん気乗りがして、繁昌な箱根の店を投げ出してまで紅葉館をやろうとした。あたしは反対したが負けた。ともあれこれは、我が家の第二の招いた災難になったのだった。母は精神をすりへらして挽回し、積累の情弊を退ぞけたが、根本の利益を目的の株式組織ということをよくのみこまないでいた。意志の疎通せぬために、中沢氏が歿しられると、母は憤死しはせぬかと思うばかりの目にあつて、結局やめた。眼の届かなかった箱根の方もやめなければならなかった。

あたしはその間に、舞踊研究会をまとめて、歌舞伎座で大会を二回、紅葉館で例会を六回催した。新舞踊劇と、古く、忘れられがちな踊りの復活を旨とした。幸いに、菊五郎も三津五郎も猿之助も、米吉、男寅の、踊れる俳優たちと、藤間は勘十郎、勘右衛門の両家、花柳からも、あらそつて出演し、新橋芸妓では踊り手の七人組をはじめ大勢が出てくれた。自作の新舞踊劇「空華」は奈良朝時代の衣装背景で、坪内先生の「妹背山」の試演がその式で紅葉館で催されたことはあるが、そうした服装での舞踊ははじめてであった。衣装は松岡映丘氏、後景は組みものだけが大道具の手でつくられ、画幕は氏のほかに美術学校から大勢来られて描かれた立派なものだった。作曲は鈴木鼓村氏の箏を主楽にしたもので、三味線楽もあしらつたが、箏曲をもとにしたのは、やはり最初でもあった。

また、劇場には出演しない葺屋町の吉住一門に歌舞伎の舞台に出てもらい、小三郎氏の作曲になる「江島生島」を初演したのもその会であった。もとより、井上八千代流の京舞をも出した。小山内薫氏がロシアやフランスからもって来た、洋行みやげの舞踊談も、幻燈で示されたりしたのもこの会の収穫だったのだ。

これが動機となって菊五郎一門の、新しい劇研究の「狂言座」を結成した。帝国劇場での第一回公演には坪内逍遙先生の新舞踊劇「浦島」をさせて頂くおゆるしをうけた。森鷗外先生には「曾我」を新しく書いて頂いた。第二回には、木下杢太郎氏の「南蛮寺門前」を中沢弘光氏の後景、山田耕筰氏の作曲でやった。吉井勇氏の「句楽の死」は平岡権八郎氏に後を描いて頂いたりした。

あたしはまっしぐらに、所信のあるところへ、火のような熱情をもって突きすすんでいた。

だが、母の打撃は見てすごさなかった。それに実家では、弟の若い嫁が、赤ん坊を残して死んだ。あたしの手にはそれは受けなければ、残された子は死にそうなほど弱かった。それに、も一つ、三上は恋愛を申入れてきかない。それに自分の方へ引っばってしまおうとする。あたしは、家庭婦として、あっちこっちに入用になって、引きちぎれるように用

をおわされた。

それを振りちぎったならば、今日、もすこしましな作を残しているであろうが、父のこと
 に対して、心に植えた自分自身との誓いは頭を^も持^た上げて、まず、人の為になにかする
 そうして、すべてを捨ててかえり見ぬこと幾年？ 昭和三年に「女人芸術」に甦えつて
 からの爾来は、あまり生^{なま}々^{なま}しいから略すことにする。

（昭和十六年十一月～十七年一月「新女苑」）

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」青蛙房

1971（昭和46）年5月15日初版発行

※「先生ンとこ」の「ン」は底本では小書きになっています。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

渡りきらぬ橋

長谷川時雨

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>